

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 4 (3)

—— 1924年3月1日～31日 ——

小池辰雄

○1924年3月1日 (土)

雪。午前中、雪がめずらしくも降る。マントを引きかぶって雪中を帰ってくるのもよかった。午後から霽れた。夕飯は中川(鰻屋)で桐寮の送別会をやった。3年生二人を驕ったのである。

○1924年3月2日 (日)

晴。非常によい天気である。春の様である。桜山の裏の方まで散歩に行った。林と四郎ちゃんと三人で。堤へ寝ころんで梅を仰ぎ見ること多時。実によかった。碧青の天空と梅の枝のみ。何と麗しい天然であつたか。そして、偶々、鶯が飛んで来てその梅が枝に宿つたのは実に僕達のために来てくれたとしか思われなかった。じつと仰いでいる中に自分が返って高い所に居て、空が大海の如く、そこを横ざる小鳥は魚の如く思われた。

富山の所へ行つて久しぶりで話す。内村先生、畦上先生、藤井先生のこと話題に上った。諸先生を慕わざるを得なかった。信仰に生きんために二人の心は躍如として、言い知れぬ希望が流れた。

○1924年3月3日 (月)

晴。お節句である。3年生卒業生の送別式があつた。桐寮も明日から三人になる。汝等の心をエホバに定めこれにのみ事えよ。アーメン。

○1924年3月4日 (火)

晴。林と四郎ちゃんが帰京した。3年の水戸の生活終えて。彼等多感、僕も感慨無量。いよいよ学年末になった。何となく嬉しい。

○1924年3月5日 (水)

晴、風。二人が帰って、桐寮は急にガランとして淋しくなった。

○1924年3月6日 (木)

晴、風寒し。少し雨が降って乾き切った土もややしめり有難いと思ったが、吹く風にすぐ乾いてしまつて、もとの黄塵である。



○1924年3月7日(金)

晴、風。天気はよいが風が烈しい。昨日で第1学年の授業は終わった。今日は休みである。明日から試験。外のことは何でもよい。いかにもあれ、汝、内に満てよ。内に平安を保ちて、歡喜と感謝に日々を送れ。明日が大切でない。明日を如何と思うなかれ。昨日は如何なりしと顧みるなかれ。大切なるは今日なり、現在なり。現在の汝の心、平安にして動ずることなければ、何をかおそれ、何をか憂い煩うことあらんや。

政美は辰雄に宿る。辰雄よ、確乎として政美の道を歩め。之誠に歓ばしき感謝なる而して大なる希望の光に進むものなり。ルーテル、守りて在り。心を強うせよ。

○1924年3月8日(土)

晴。試験は今日より。9日、試験はなし。10日、11日、12日、13日(木)。試験が始まってしまえば終るのは速いものである。しかしかなり苦しかった。最後の日は完全に失敗した。が、1学年が無事終了して嬉しかった。13日(木)は午後2時の汽車で帰京した。この汽車でかえったものは少なかった。独逸語の先生、中島教授、広島の高専学校へ転任された。担任の先生であった。温厚の君子人である。先生に御厄介になること、約2ヶ年である。「叱る」ということをされない先生であった。出来ないこと、反対に恐縮される位である。東京は相変わらずごたごたである。喧々囂々である。

○1924年3月9日(日) ～ 13日(木)

〔記載なし〕

○1924年3月14日(金)

朝起きたのは11時であった。

○1924年3月15日(土)

午前、丸の内ビルディングへ行った。それから銀座の丸善へも行った。明日のお供えのリンゴを三つ買って来た。午後から平口様と武田へ行った。帰宅したのは8時であった。行ったのは母上様と。入浴して、寝た。

○1924年3月16日(日)

父の御命日。今日は父上の第十七回忌に当たる。僕は父上を殆ど知らない。故に別に悲しい感じはなかったが、母上様の御心を察して悲しまざるを得なかった。丸の内ビルディングまでお使いに行った。サンドイッチと洋食折詰を14つつ提げて来た。武田から3人、青木から2人、山本の姉上と富美ちゃん、それに母上、兄上、僕。座敷で御法事をした。北



条様が来て下さった。御達者で、相変わらずの御元氣である。火災、震災当時の談がまた出た。7時半頃、皆帰られた。

○1924年3月17日(月)

晴。午前8時起床。牛込館へ「岩窟王」を見に行った。宣ちゃんと俵と三人で。デューマーの傑作だけに非常に面白かった。よく撮れていた。外のは見るに堪えず出て来てしまった。夕方は寒かった。

○1924年3月18日(火)

晴。今朝かなり風があるので心配したが、隅田川岸へ行ったところは静まって、安心し、且つ感謝であった。大塚、武井、四郎ちゃん、宣ちゃん、都合5人である。附中の最新艇を出した。アウト・クラッチである。艇の軽いのに驚くばかりであった。もとの新艇が軽いと思っていたのが正にそれ以上である。上へ上へと漕いだ。実に快また快であった。河上は湖の様である。1ストローク毎に実によい気持である。小台の渡より更に上の方へ行った。久しぶりで実に愉快だった。夕陽の西方に傾く頃、ボートを引き揚げた。

大塚に静岡の話聞かされて、羨望に堪えなくなった。1年おそれれば静岡を受くべかりしものと思った。しかし、授けられた地は授けられた地である。水戸に己がベストを尽くすのが僕の本務である。

○1924年3月19日(水)

晴。今晚はよい月夜であった。佐藤六郎様が母上のために読書に來られた。僕の元気なのを見て、大層よろこばれた。

今日は藤井先生のお宅へ上った。兄上の原稿が近い中に出版される。その校正の事で僕がこれに与り得るのは誠に嬉しい。来たら大いに意気込んでやろう。

ぐずぐずしていないで。偉くなろう。とらわれないで、しっかりと。身体を先ず強健に。それには、精神。僕の心である。人である。人とならん。

辰雄は政美と同心同体であるべきものなのである。

○1924年3月20日(木)

晴。母上と午後から、鮫ヶ橋の二葉幼稚園へ山室軍平大佐の講演を聴きに行った。「罪」に関してであった。生ぬるい基督者にはなりたくないと感じた。グラッドストーンを思え、バンヤンを思え、ルーテルを思え、である。



○1924年3月21日(金)
罪の一日。

○1924年3月22日(土)
曇。母上とお墓詣りに行く。スイートピーの種子を蒔いて来た。

○1924年3月23日(日)
晴後雨。迷える者よ。

○1924年3月24日(月)
罪のかたまりよ、迷える羔よ。我は危うし。

○1924年3月25日(火)
虚偽の生活よ、それで基督者か。神は遠く離れ給えり。

○1924年3月26日(水)
危うし、危うし、汝は食の奴隷なり。

○1924年3月27日(木)
灯は消えなんとす。

○1924年3月28日(金)
汝は神の国と義とを忘れて、文明の悪魔の奴隷となりて死なんとするか。

○1924年3月29日(土)
曇。天暗し。懸崖より墜ちんとする羔は正に我なり。迷える羔よ、正に墮ちんとす。この時、この時、汝仰ぎ瞻^みよ、仰ぎ瞻よ。主は今、汝を救わんとし給う。主に頼れ、主にすがれ、迷える者よ。谷底のおそろしき誘惑者に眩惑すること勿れ。仰ぎ瞻よ。主は近し。主は救い給うなり。主よ、主よ、すべての罪を、虚偽と驕奢と怠惰と浮薄を洗い去り給え。救い給え。主よ、主よ、迷える私を。救い出し給え。ああ、救いの道はただ主に在るのみなり。アーメン。

主よ、聖旨は深し。御罰は厳なり。而してすべて、愛に満てり。迷える私を本当に覚まして下さいまして、有難とうございます。どうか心の奥底に宿り給いて、有ゆるサタンに勝たしめ給え。聖名をなさしめ給え。今より後、聖旨に叛くことあらば、その時は如何に



も罰し給え。

ああ、信仰なき我、亡びんとする我。全く主に叛きし我を、未だ見棄て給わざりしを深く感謝し奉ります。今よりのち、かかる言を吐かしむることなからしめ給え。己れ、主に叛きて、自ら禍を招きて主にすがらんとするこの不埒者。

主よ、願わくは、再びかかる不埒者たらざらんことを誓い奉ることをゆるし給え。迷える羔に主の御手は下りぬ。感謝なり。

『パウロは曰う、汝等霊に由つて歩むべし。然らば肉の慾をなすこと勿らん。悪魔は肉に拠りて彼を下に誘わんと努めつつあり。神は霊に宿りて彼を上を召さんと為し給う。危機一髪とは実に人の生涯である。彼の小さな胸の中に人類の運命に関わる最大戦争は常に闘われつあるのである。』(『聖書の研究』明治43年10月)

○1924年3月30日(日)

晴。あさがおの種子とコスモスの種子を蒔いた。この間蒔いたポピーとスイトピーの芽が未だ出ない。フリジャが咲きだした。白百合の生花の蕾が開いて机の上で笑っている。宇都宮の兄上が今晚、帰宇された。彼の1週間に教えられるところがあつた。それは「落ちつき」というものであつた。

○1924年3月31日(月)

晴。実によい天気であつた。郊外散歩には絶好であるが、今日は大掃除であるので、出掛けるわけに行かず。終日、埃塵をかぶつてはたらいた。おかげで、もち菓子も食べられた。こんな丈夫な胃をいただいて自らの不養生で害することがあつては、最もなさない人間の一人とならざるを得ないわけで、そんな人間は高等学校へなんか行かぬがましであらう。

